

家族関係がファッションへの価値観に与える影響

星 夏帆

1. はじめに

1.1 ファッションとは

ファッションとは英語からの外来語であり、「流行」と訳されることが多い。iDA Magazine[1]によると、狭義の意味としてはヘアスタイル・メイク・アクセサリなどを含む装い全般を指すが、広義の意味として音楽やインテリアといったライフスタイルまでも指すことがあるという。

本研究において、ファッションとは「自分自身をよく見せようとするために身につけるもの、またはその行為のこと」と定義する。これには服装以外にもヘアスタイル・メイク・アクセサリなども該当することとする。また、このファッションに対する好みや価値観のことを「ファッション観」と呼ぶ。

1.2 研究背景および研究目的

経済生活において衣食住は重要な三要素である。その中でも食物・住居は人間の生理的欲求を満たすものであることに比べ、現代における衣服は自己実現欲求を満たせるものであり、自身を表現できるという特徴がある。矢野経済研究所[2]によると、2022年の国内アパレル小売の市場規模は前年比105.9%の8兆591億円であり、2年連続で前年を上回っていることがわかる(図1)。また、この市場規模は農林水産省[3]が概算した令和2年における農林漁業の国内生産額4兆9,343億円を上回る規模である。

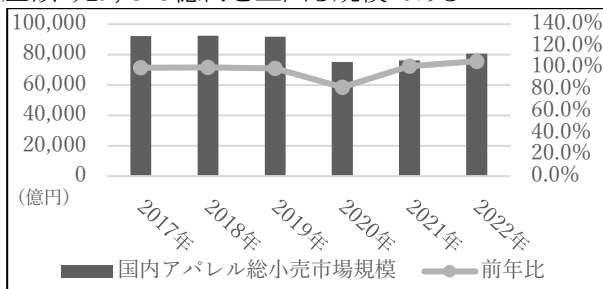


図1 国内アパレル総小売市場規模推移

(出典: 矢野経済研究所「国内アパレル市場に関する調査を実施(2023年)」より筆者作成)

このように、衣服を含むファッションは消費において重要な位置にあるが、消費者のファッション観はどのように形成されるのだろうか。

本研究では、どのようにしてファッション観が形成されているのかについて新たに実証結果を提示する。それにより、経済分析において重要な前提となる人々の選好がどう形成されるのかを明らかにする。また、本研究は顧客のニーズを把握することにもつな

がるため、マーケティング分野においても寄与するものである。

2. 先行研究および仮説

ファッション観の形成に関して、主に母親からの影響を検証した先行研究がいくつか存在する。

増田・浅井[4]では、母親と娘の家族関係とそこから形成される娘のファッション観について、18歳から25歳の女子学生とその母親を対象にした調査から、母親と衣服を通じたコミュニケーションが多いと母娘どちらも衣服の購入価格が高いなど、母娘のファッション観に関連性が見られた。母親のファッションに対する考え方が娘のファッション観に影響を与えていることが明らかとなった。

また、増田・本多[5]では、小学校1～6年生の児童の保護者を対象に、保護者と子供のファッション観や衣服の調達スタイルについてアンケート調査を行った。調査より、保護者もしくは子供のファッション観が低いと通販を利用する傾向がある、親子でファッション観が異なる場合、保護者が主体となり衣服の選択・購入を行っているといった点が明らかとなった。

先行研究では、母親とその娘を中心に調査をしていたが、兄弟・姉妹といった組み合わせに着目した研究はなかった。兄弟・姉妹は母親と比べ年が近いため、価値観の形成に大きな影響を与えている可能性がある。そのため本研究では、「兄弟・姉妹などを含む家族との関係が、衣服に対しての価値観の形成に関連する」という仮説を立て、検証する。母親以外の家族関係に注目し、ファッションへの価値観の形成との関係性について明示することを本研究の新規性とする。また、先行研究では女子学生のみを対象としていたため、本研究では男子学生も対象とし調査することも新規性のひとつである。

具体的には、以下の二つの仮説を検証する。

仮説①: 家族とファッションに関して親密なコミュニケーションをとっているほど、本人のファッション観が高い。

ファッションに関して意見を交わすことが多ければ、お互いのファッション観を刺激し合う可能性がある。

仮説②: 家族のファッション観が高いほど、自身のファッション観も高い。

身近なファッション観の高い家族を参考にすることで自身のファッションにも反映したいと感じる可能性がある。

3. 調査および分析の概要

3.1 調査方法

服やアクセサリなどを自身で購入する機会が増える18～23歳の大学生とその家族を対象に、アンケート調査を2回実施した。1回目は学生、2回目は1回目で回答した学生がよくコミュニケーションをとる家族に向けたものである。2回の調査により学生本人のファッション観とその家族のファッション観の関連性を明らかにする。

対象: 会津大学短期大学部及び会津大学の学生

方法: Googleフォームによるアンケート調査

期間: 1回目 2023年10月25日～2023年11月30日

2回目 2023年12月17日～2024年1月10日

有効回答件数: 1回目139件

2回目11件

3.2 調査項目

増田・浅井[4]と増田・本多[5]を参考に、以下のよう調査した。

1回目は年齢や家族構成などの「基本属性」、ファッションに対する関心の高さや購入先などの「ファッション観」、ファッションを通じたコミュニケーション有無などの「家族関係」について尋ねた。なお、ファッション観は、「ファッションに興味がある」「流行に合わせたファッションをする」などのファッションに関する17項目の質問の合計点である(各質問は5段階で評価し、5ほどファッション意識が高い)。家族関係は、「服の貸し借りをするか」「ファッションについてよく話すか」などファッションを介した親密度を表す(7項目の合算値として算出した)。

2回目は1回目の調査項目と同じ内容を学生の家族に尋ねた。これにより学生とその家族の認識の違いを分析する。

4. 分析方法

各項目の相関関係をExcelで分析し、統計的に有意な関係があるか検証した。検証した項目は以下のとおりである。それぞれ、仮説の①と②に対応する。

① 学生自身のファッション観と学生から見た家族関係(ファッションを通じたコミュニケーション)の相関関係

② 学生とその家族のファッション観の相関関係

なお、これまでに研究が少ない男性の選好や母親以外の影響を検証するため、①については、男女別、コミュニケーションをとる家族別(母親か母親以外)でも分析を行う。

5. 分析結果

5.1 記述統計

1回目のアンケートのデータ概要は以下の通りで

ある(表1)。「女性ダミー」は女性を1、男性・その他を0としている。また、「家族ダミー」はコミュニケーションをとる家族を「母親」や「それ以外の家族」と回答した人、つまりコミュニケーションをとる家族がいる場合は1、コミュニケーションをとる家族がいない場合は0の値をとる。なお、コミュニケーションをとる家族を「母親」と回答した人は全体の約70%と、大半を占めていた。

表1 学生本人に対するアンケート(1回目)のデータ概要

	サンプル数	平均値	標準偏差
女性ダミー	139	0.74	0.44
年齢	139	19.28	0.85
ファッション観	139	66.16	12.08
家族関係	127	20.87	5.79
家族ダミー	139	0.91	0.28

2回目のアンケートのデータ概要は以下の通りである(表2)。「母ダミー」は学生との血縁関係が「母親」である場合を1、それ以外の血縁関係である場合は0の値をとる。2回目のアンケートの回答者は、母親以外では、姉妹2組・姉弟1組・兄弟1組の計4組であった。

表2 家族に対するアンケート(1回目)のデータ概要

	サンプル数	平均値	標準偏差
女性ダミー	11	0.91	0.30
年齢	11	38.91	14.12
ファッション観	11	65.36	10.60
家族関係	11	23.73	6.39
母ダミー	11	0.64	0.50

5.2 学生本人に対するアンケート(1回目)の分析

コミュニケーションをとる家族が「いる」と回答した学生(以下家族あり)について、ファッション観に関する17項目の合計点と家族関係に関する7項目の合計点の相関は以下の通りである(表3)。全体として、ファッション観と家族関係には統計的に有意な低い正の相関が得られた。このことから、家族とファッションに関して親密なコミュニケーションをとっているほど、本人のファッション観が高いことがわかる。

表3 学生自身のファッション観と家族関係の相関(家族ありの場合)

相関係数	0.24
標本数	126
t値	2.80
自由度	124
p値	0.00

男女別のファッション観と家族関係の相関は以下の通りである(表4)。女性については低い正の相関が得られた。しかし、男性については低い負の相関が得られたが、p値が0.35と有意水準0.05を上回っており、統計的に有意な差が認められなかった。女性に関しては仮説①を立証するが、男性に関してはあてはまらない結果となった。男性は家族よりもその他の人間関係やSNSなどからファッション観が形成されているのではないかと。

表 4 学生自身のファッション観と家族関係の相関
(男女別の場合)

	男性	女性
相関係数	-0.19	0.25
標本数	26	95
t 値	0.94	2.46
自由度	24	93
p 値	0.35	0.02

よくコミュニケーションをとる家族が「母親」と回答した人(以下母)と、それ以外の回答をした人(以下母以外)のファッション観と家族関係の相関は以下の通りである(表 5)。母については低い正の相関が得られ、ファッション観と家族関係には関連性が見られた。この結果は増田・浅井[4]と一致する。母以外について、同じく低い正の相関が得られたが、p値が0.95と有意水準を上回っており、統計的に有意な差が認められなかった。増田・浅井[4]のように母親は学生自身のファッション観に影響を与えているが、それ以外の家族には強い関係が見られないことがわかる。

表 5 学生自身のファッション観と家族関係の相関
(母と母以外の場合)

	母	母以外
相関係数	0.23	0.26
標本数	90	39
t 値	2.26	1.64
自由度	88	37
p 値	0.03	0.95

5.3 家族に対するアンケート(2回目)の分析

1回目で回答した学生がよくコミュニケーションをとる家族について、ファッション観に関する17項目の合計点と家族関係に関する7項目の合計点の相関は以下の通りである(表 6)。1回目と同じく、ファッション観と家族関係には低い正の相関が得られたが、p値が0.81と有意水準を上回っており、統計的に有意な差が得られなかった。学生とは違い、学生とのファッションを通じたコミュニケーションが家族自身のファッション観に影響しないことがわかる。サンプル数が一番多い母親は、学生時代などにファッション観が確立されており、学生本人とコミュニケーションがあるとしてもファッション観に変化がない可能性がある。

表 6 家族自身のファッション観と家族関係の相関

相関係数	0.30
標本数	11
t 値	0.93
自由度	9
p 値	0.81

学生とその家族のファッション観の相関は以下の通りである(表 7)。低い正の相関が得られたが、p値が0.95と有意水準を上回っており、統計的に有意な差が得られなかった。これは、表 6より、学生とのファッションを通じたコミュニケーションが家族自身のファッション観に影響しないことが関係していると考えられる。

表 7 学生自身のファッション観とその家族自身のファッション観の相関

相関係数	0.53
標本数	11
t 値	1.86
自由度	9
p 値	0.95

6. 考察

先行研究では母親と娘のみを対象にファッション観について検証されていた。本研究では、どのようにしてファッション観が形成されているのか母親以外の家族関係と男子学生も含め分析した。

ファッション観と家族関係について、全体としては低い正の相関が得られた。これにより、家族とファッションに関して親密なコミュニケーションをとっているほど、本人のファッション観が高いという仮説①が立証された。しかし、表 4の男性と表 5の母以外に関してはこうした関係が見られなかった。男性は女性のように家族のファッション観から影響されるのではなく、その他周囲の人やSNSなどによってファッション観が形成されているのではないかと。

また、表 6より、学生とのファッションを通じたコミュニケーションが家族自身のファッション観に影響しないことがわかった。サンプル数が一番多い母親は、学生時代などにファッション観が確立されており、学生本人とコミュニケーションがあるとしてもファッション観に変化がない可能性がある。

母親は学生のファッション観に影響を与えている。以上としては、母親を含めたマーケティングを展開していくべきである。

7. 今後の課題

本研究では、どのようにしてファッション観が形成されているのかを家族関係に着目して調査した。

調査対象が会津地域の大学生に限られていたり、母娘以外のサンプル数が少なかったりと、データに偏りがでてしまった。また、男子学生のサンプル数も少ないため、より一般性の高い結果にするためには調査対象の範囲を広げる必要がある。

ファッション観の形成についても、家族以外の人間関係やSNSなども視野に入れた調査が必要である。

謝辞

ご多忙の中、アンケートに回答して下さった会津大学短期大学部及び会津大学の学生、家族の方々に改めて感謝申し上げます。

参考文献

- [1] iDA Magazine, アパレルとは？ファッションとどう違うの？アパレル業界超入門編・職種と仕事内容を

- 解説, <https://ida-mode.com/contents/post-515/>
- [2] 株式会社矢野経済研究所, 国内アパレル市場に関する調査を実施(2023年),
https://www.yano.co.jp/press-release/show/press_id/3354
- [3] 農林水産省, 令和2年農業・食料関連産業の経済計算(概算),
https://www.maff.go.jp/j/tokei/kekka_gaiyou/keizai_keisan/r3/index.html
- [4] 増田智恵, 浅井彩加, “母と娘の家族関係から見るファッション観の形成分類”, 三重大学教育学部研究紀要. 自然科学・人文科学・社会科学・教育学・教育実践 Vol.67, pp125-139, 2016
- [5] 増田智恵, 本多実鶴喜, “小学生の衣生活を形成する親子のファッション観”, 三重大学教育学部研究紀要. 自然科学・人文科学・社会科学・教育学・教育実践 Vol71, pp235-244, 2020